

まちづくりを 自分たちの問題と とらえて

明治以前の日本には伝統的な都市計画の概念がありました。しかし、近代社会、特に戦後は復興の機運の中で、西欧に追いつけ追い越せと、日本の歴史や伝統、文化、風土は軽視され、道路、港湾、空港といった国土基盤整備や防災に重点を置いた都市づくりが行われてきました。関西地域も同じで日本の中での役割や伝統文化を十分に活かしきれていません。ある経済団体が、大阪で働く人々に“大阪に住みたいと思うか”とアンケートをとりました。その結果、半数が「住みたくない」と回答しました。そのまちで働く人々が住みたないまちに産業誘致や観光客誘致をしてもうまくいきません。「住」を核に大阪のまちを考え直すべきです。今、大阪には多くの都心型高層マンションができています。確かにそれは都心居住という「住」の選択肢を増やすことになっているのかもしれませんが、まち全体の都市計画をおろそかにしてはいけません。関西には大阪、京都、神戸など魅力的な都市が集まっています。もう一度それぞれの都市の魅力を見直し、その風土も考慮しながら各都市をうまく結び付け、魅力ある地域となることが求められています。

魅力的なまちをつくるには、どのようなまちにするかを土地の歴史や文化なども考慮して住民がまず考え、行政サイドがそれをくみ上げてまちづくりや都市計画に反映させることが必要です。住民・行政がそのような意識を持つことが、少しずつでもまちを変えていくのです。また、企業も地域の住人であるという意識を持ち、社会的責任の一つとしてコミュニティー活動にもっと参加するべきだと思います。

北梅田地区についても、大阪のまち全体、そして大阪の中でのこの地区の位置付けを考えるとところから始めるべきです。一からつくっていくまちですから、まちの



大林 剛郎氏

Takeo Obayashi

大林組会長

スカイライン、建物のデザイン、交通アクセスを含め、美しいまちをつくる千載一遇のチャンスです。世界を代表する、大阪の玄関としてふさわしいまちにしてほしいと思っています。美しいまちと言っても、きれいすぎて魅力に欠けるまちではなく、そこで住む人、働く人、訪れる人にとって優しいまちであるべきです。それには赤ちょうちん的な場所などもソフトとして作りこみ、和める空間とすることが必要です。難しいとは思いますが、安全で癒しのある空間になればと願っています。この境界が一変すると大阪のイメージも変わります。関西の人々や企業が情熱をつぎ込み、みんなで考えればきっといいまちができるでしょう。

私が考えるすばらしいまちとは、仕事、住宅、文化などの面で選択肢の多いまちです。関西は京都、奈良などの文化的な都市があり、神戸から瀬戸内海にかけては海が開けています。複数の空港や新幹線の駅もあり、交通アクセスもいい。大阪で働き、神戸に住み、京都で遊ぶという人が多いのもうなずけます。このように関西は環境的に恵まれ、歴史的、文化的資産があるうえに、すばらしい企業があり、優れた人々がいます。しかし、残念ながらそれらがうまく融合されていないと感じます。企業も個人もその力を引き出す意識を持ちきれていないのです。“自分さえよければいい”という意識を変え、まちづくりを自分の問題ととらえれば思いも深くなります。これからはまちづくりについてもみんなで大いに考え、行動するべきです。

談